

# この世で最も不幸な人々

## 16世紀モロッコの改宗者たち

日本中東学会第39回年次大会(2023/05/14)

TUFS, JaCMES特任研究員  
篠田知暁

### 1. 序論

#### 1.1. サアド朝盛期マラケシュの都市景観におけるヨーロッパ人

- 1578年アフマド・マンスールの即位(~1603)
  - 25年の治世はサアド朝の最盛期
  - ヨーロッパ各地からマラケシュを訪れる商人や使節
  - 戦争や私掠によるヨーロッパ人の捕虜
  - キリスト教からの改宗者

#### 1.2. この世で最も不幸な人々？

##### ▪ 改宗者たちは「この世で最も不幸な人々」？

###### ▪ ポルトガル人ジェロニモ・デ・メンドーサの述懐

「…」彼らをこのように「キリスト教徒」と呼ぶことは、いくら彼らが心の中ではそうなのだとしたとしてもできないが——というのも彼らは棄教したのであるから——、ムーア人と呼ばれることもないように思われる。このようにキリスト教徒であることやめながら、彼らは外面が内面とは異なるかのように見せている。彼らの一部が、改宗者はこの世で最も不幸な人々である、と言うのは、非常に理に適ったことである。ムーア人たちは彼らをキリスト教徒と、キリスト教徒たちはムーア人であるとみなすからである。彼らはどちらでもないで、両者の意見のいずれも正しくはないのだが (Mendoça 2, 42)

改宗後の孤立と精神的苦痛を誇張し、改宗を戒めようという意図があるのではないか？

#### 1.3. 改宗者のアイデンティティ

##### ▪ Bennassar & Bennassar(1989)

- 異端審問の記録を利用しながら、初期近世地中海の改宗者に関する総合的な研究を行う
- 改宗について調書での供述の誠実さに否定的な見解
- 改宗者たちはイスラーム社会の解放性によって社会的上昇を実現し、他の人々と混合していたと評価

##### ▪ Mediano(2002)

- 改宗者とキリスト教徒の関係の継続と他のムスリムとの隔離
- 改宗者に対して、より中間的なアイデンティティを想定

## 1.4. 改宗者の現地社会への統合と世代交代

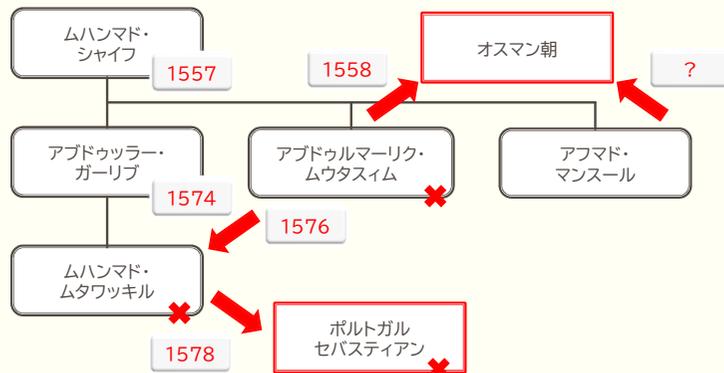
- 異端審問調書の限界
  - 何らかの理由でヨーロッパに戻り、教会との和解を求めた人々
  - それ以外の改宗者は、どのように現地社会と統合していった(もしくははしなかった、できなかった)のか?
- 1585年マラケシュで起きた殉教事件の記録を、改宗者のムスリム社会との統合という観点から分析する
  - その背景として、特にマンスールの治世に改宗者軍人が置かれていた状況を明らかにする

## 1.5. 史料

- アブドゥルアズィーズ・フィシュターリー(1621/2年没)
  - マンスールの文書局長
  - マンスールの治世に関する年代記 *Manāhil al-ṣafā'* の著者
- ジェロニモ・デ・メンドーサ(1607年以降没)
  - ポルトガル人軍人でワーディー・アル＝マハーズインの戦いで捕虜となる
  - 帰国するまでフェズとマラケシュに滞在
  - *Jornada de Africa*(1607)において戦い、捕虜の解放、殉教事件について記述
- アントニオ・デ・サルダーニャ(1656年没)
  - タンジャ司令官の息子で1592年の戦闘で捕虜となる
  - 1606年までマラケシュに滞在し、モロッコでの出来事を見聞
  - 帰国後マンスールの年代記(*Crónica de Almançor*)を執筆

## 2. マンスールに仕えた改宗者たち

### 2.1. マンスール即位の経緯



### 2.2. 国家の役職におけるアラブとアジャムの分割

- フィシュターリーの説明(al-Fishtālī 200-203)
  - アブドゥルマーリクの時代にオスマン朝式の軍事制度の導入
  - マンスールは国家の役職をアラブとアジャムで分割
    - アラブ: 助言、行政、騎兵の指揮
    - アジャム: オスマン朝式の軍隊、スルターンの近衛兵
- マラケシュの小銃兵部隊
  - スース人、シャッターガ、改宗者、アンダルス人
  - 特に後者の2つが重要で、領土の鎮定、征服、徴税

### 2.3. 改宗者軍団の規模

- サルダーニャの証言(Saldanha 32-33)
  - 即位当初のマラケシュの軍隊:アンダルス人4000人、トルコ人2000人、ザワーワ4000人、シャッターガ4000人、シパーヒー2000人、改宗者2000人
  - 非常に良い兵士で、マンスールは彼らを信頼し、護衛に用いた
  - 多くの場合アンダルス人とセットで言及
    - スーダン遠征では6000人(162-65)
    - マンスール没後の内戦中には10000人動員(380-83)
  - アルジェやチュニスにエージェントを派遣して兵となる改宗者を集める(142-46)

### 2.4. 改宗者の改宗以前と以後の連続性

- サアド朝のスルターンたちは改宗者の信仰を問題としなかった
 

ムーレイ・アブドゥルマーリクは、幾度かマラケシュのキリスト教徒の教会に入ったとき、好奇心から聖水を改宗者たちにかけて。これをためらう者がいると、なぜ真実を否定するのかと言いながら、大笑いしていた。また彼はしばしば言っていた。生命と身体は私に忠実に仕えよ、魂は私に何も与えないのだから、と。実際バルバリアの王たちは、改宗者たちはムーア人ではないとよく知っていた。しかし彼らは彼らに非常に忠実で、ムーア人は気まぐれな裏切り者なので、彼ら〔改宗者〕をあてにし、多くの恩恵と名誉を与えていた (Mendoza 2, 46)

### 2.4. 改宗者の改宗以前と以後の連続性

- 改宗者たちはキリスト教的な習慣やふるまいを継続
 

これらの人々は、彼ら自身についてもそれ以外についても、ムーア人とは非常に異なった生活をしている。彼らの大半は、妻を多数持つことが可能なのに、一人しか持たない。多くはムハンマドを公然と侮辱し、我々の祈禱を行う。彼らはそれから何も利益を得られないのに。あくびをしたとき口の前で十字を切る者もいる。悪魔がどれほど彼らに取り憑いても、この聖なる習慣を打ち負かすことはついにできなかったのだ。これらの人々の多くは、子供たちに半ば公然と洗礼を行う (Mendoza 2, 42)

### 2.4. 改宗者の改宗以前と以後の連続性

- 改宗者の貴婦人ラツラ・カビーラの事例 (Mendoza, 2: 78)
  - ポルトガル人貴族の娘で、ムスリマとして育てられ、改宗者高官と結婚
  - 衣服をのぞきポルトガル人と同様の生活
  - 2人の娘も改宗者の高官と結婚
  - 屋敷の中ではポルトガル語を話し、外ではアラビア語を話す
  - ポルトガル人と親しくし、捕虜を支援する
  - ポルトガルへの愛着は第二世代まで継続

### 3. マラケシュ殉教事件

#### 3.1. 事件の概要

- 1585年ある改宗者の息子と、同世代の6人の改宗者の若者がキリスト教信仰を公にし、その撤回を拒否したため処刑される (Ricard 1956; 1957)
- 史料
  - メンドーサの *Jornada de Africa* の第3部
    - 1589年マラケシュで没した三位一体修道会のアントニオ・デ・コンセイサンの報告に、ポルトガルで得られた情報を追加
  - サルダーニャの年代記
    - マラケシュ滞在中に関係者から見聞きした情報。特にキリスト教信仰を撤回した当事者と親しい関係

### 3.2. カプクル式のエリート養成制度

- メンドーサによれば、アブドゥルマーリクはオスマン朝のカプクルに類似したエリート養成制度を導入

ムレイ・アブドゥルマーリクはトルコから彼以前の王たちの間では知られていなかった新しい習慣を持ち込んだ。それは門の中で若い改宗者を利用するというものである [...]。彼らはムーア人として育てられるか、少なくとも、異例な拷問によってそう見えるようにされ、若年であるので、もし可能であれば否定するようなことに応じることを強いられ、そしてこのような習慣を身につけ、そうであると評価されるようになるとすぐに、彼らに対して読み書きやそのほかの仕事と技術を、それぞれの傾向に応じて教えるよう命令される。彼らは常に隔離されて暮らし、集団で、彼らの世話をするカーイドを伴って出なければ外出しない。彼らの数は通常40か50だが、シャリーフが[若い捕虜を]見つければそれ以上となる (Mendoza 2, 99-100)

### 3.2. カプクル式のエリート養成制度

- サルダーニャも同様の報告 (Saldanha 106-107)
  - これらの若者は捕虜になった時15歳以下
  - 彼らは割礼を受け、ムーア人の衣服を着る
  - 彼らのカーイドはアンダルス人軍人で宦官のジャウダル
  - 彼らは8人を除き、ムーア人によって墮落させられた

### 3.3. 殉教者たちのプロフィール

- アリー、別名フランシスコ・エスペランサ (Mendoza, 2: 100, 118-22; Saldanha 110-111)
  - マラガ出身の改宗者とムスリムの息子で、ムスリムとして生まれ育てられる
  - 父親の死後、貧困のため7~8歳でマンスールの屋敷へ奉公に上がり、若い改宗者たちのチューターとなる
  - カスティーリャ人やポルトガル人と親しくなり、スペイン語を学び、キリスト教に関心を持つ
  - 親しい者たちの間ではフランシスコ・エスペランサを名乗るようになる

### 3.3. 殉教者たちのプロフィール

---

- 処刑された6人の改宗者 (Mendoza, 2: 123-38)
  - シマン・フレイタス、ポルトガル人
  - フェルナン・ジネス、ガリシア人
  - ジョアン・フランセス、フランス人でリスボンに移住
  - ドミンゴス、ポルトガル人
  - アマロ、ポルトガル人
  - アントニオ・ダ・シルヴァ、ポルトガル人
- 処刑を免れた2人 (Saldanha 118-19)
  - ルイス・ゴメス、ポルトガル人
  - レアン・カメロ、ポルトガル人

### 3.4. 殉教事件

---

- メンドーサによる事件の報告 (Mendoza 2: 102-118)
  - マンスールの屋敷の中で、若者たちの一人とシャバンという改宗者の間で口論が起き、若者たちのキリスト教信仰が表ざたになる
  - 報告を受けたマンスールは、彼の屋敷の中で育った彼らがキリスト教を信仰していると聞いて困惑
  - フランシスコの棄教に怒ったマンスールは、直接責任があると考えられた修道士の処刑を命じる
  - マンスールは側近とともに若者たちに棄教を撤回するよう命じる
  - 7人はこれを拒んだため、マンスールは彼らのカーイドであるジャウダルに処刑を命じる

### 3.4. 殉教事件

---

- サルダニャの報告 (Saldanha 110-19)
  - 賭け事が原因で争っていた2人の改宗者をフランシスコが仲介を試みると、一方が逆恨みをして、若者たちの信仰をマンスールに告発
  - その場に居合わせたカーディー
    - カーディーは必至で、耳に手を当て顔を背けるそぶりを繰り返した
  - マンスールの呼び出しを受けて、友人たちの困惑をよそに、ただ一人事情を分かっているフランシスコは、状況を説明し「時はきた。君たちの本心が、本当に私に対して繰り返し言われていたことと同じなのか、わかるだろう」と述べる
  - フランシスコはマンスールの前でキリスト教の信仰を表明し、他の者たちもこれに続いたため、マンスールは彼らの処刑を命じる

### 3.5. 殉教事件におけるフランシスコの役割の重要性

---

- フランシスコは若者たちが殉教する事態を意図的に招く
  - マンスールの呼び出しに対して、困惑する他の若者たちに殉教の時が来たのだと主張
  - マンスールは当初、若者たちを処刑するつもりはなかったとされる
    - シャリーフは彼らを殺すつもりなどなく、[やってきた若者たちが] 何か口にする前に、カーディーの前で屋敷のある若者が言ったことは嘘である、それが嘘であることはわかっている、と彼らに言った。彼らの誰かがこれを肯定するか、彼らが黙っていれば、疑いなく彼は彼らを帰らせた。
  - マンスールの審問に対して、率先してキリスト教の信仰を告白し、処刑を招く

### 3.6. フランシスコの精神的危機

- フランシスコはムスリムのアイデンティティを強く否定
    - サルダーニャ
      - マンスール: 犬め! お前の父と母は何者だ!
      - フランシスコ: キリストと聖母マリアです
    - メンドーサ
      - マンスール: お前の父はムーア人ではなかったか? お前の母と兄はムーア人ではなかったか? [...]
      - フランシスコ: 私の父がムーア人であったことはありませんし、私の母は聖母マリアだけです。
- 宗教的・社会的なアイデンティティの不安定さを反映

## 4. 結論

### 4.1. フランシスコが一人、二人、三人…千人?

- マラケシュ殉教事件は、単なる不幸な状況に置かれた改宗者の息子の暴走なのか?
    - メノッキオが一人、二人、三人…千人 (Zambelli 1979)
    - フランシスコたちの殉教と類似の事件は知られていない
      - 殉教死という極端な結末に至ってしまったがために、この事件は当時の改宗者とその子弟が抱えていた構造的問題を露わにする手がかりとなる
- Cf. ファティマが一人、二人、三人…千人 (Dursteler 2011)

### 4.2. 殉教事件の構造的要因

- サアド朝の軍制改革
  - オスマン朝をモデルにした改革を、改宗者のようなモロッコ地域の部族社会の外部者を利用して進める
  - オスマン朝とハブスブルグ家の緩衝地帯となったモロッコ地域において政治的独立を確保し、新たな領土を獲得し、領内の部族民を従属させて徴税を行う
- 改宗者は宗教・文化・社会的にあいまいな状況に置かれる
  - 国家の関心は改宗者の忠誠と能力に集中、信仰心だけでなく言語や文化、社会的関係には干渉しない
  - 現地社会に統合するより、エリート軍人としてこれを抑圧する
    - 彼らのあいまいな状況は、しばしば第二世代にも引き継がれる

## 5. Selected Bibliography

- Bennassar, Bartolomé, and Lucie Bennassar. 1989. *Les Chrétiens d'Allah: L'histoire extraordinaire des renégats XVIe-XVIIe siècles*. Paris: Perrin.
- Dursteler, Eric. 2011. *Renegade Women: Gender, Identity, and Boundaries in the Early Modern Mediterranean*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Al-Fishtāli, 'Abd al-'Aziz. 1972. *Manāhīl al-Safā' fī Maāthir Mawālī-nā al-Shurafā'*. Edited by 'Abd al-Karīm Kurayyim. Al-Ribāt: Wizārat al-awqāf wa-l-shu'ūn al-Islāmiyya.
- Mediano, Fernando Rodríguez. 2002. "Les Conversions de Sebastião Paes de Vega, un Portugais au Maroc Sa'dien." In *Conversions islamiques: Identités Religieuses en Islam méditerranéen*, edited by Mercedes García-Arenal, 173–92. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Mendoça, Jerónimo de. 1904. *Jornada de Africa*. Lisboa: Escripório.
- Ricard, Robert. 1956. "Les Sept Martyrs de Marrakech En 1585: Etude Des Sources Portugaises." *Arquivo de Bibliografia Portuguesa* 8: 280–88.
- Ricard, Robert. 1957. "Le Maroc à la fin du XVIe siècle: D'après la *Jornada de Africa* de Jerónimo de Mendoça." *Hespéris* 44: 179–204.
- Saldanha, António de. 1997. *Crónica de Almançor, Sultão de Marrocos (1578-1603)*. Edited by António Dias Farinha. Translated by Léon Bourdon. Lisboa: Instituto de Investigação Científica Tropical.
- Zambelli, Paola. 1979. "Uno, Due, Tre, Mille Menocchio?" *Archivio Storico Italiano* 137 (1): 51–90.